

2005年のストラディングから

たる はじめ
樽 創 (学芸員)

ストラディング (stranding) という言葉を知っていますか？ 英和辞典を引くと「岸に乗り上げること」「座礁すること」という意味であることがわかります。そのため、生物が海岸に打ち上げられる場合もストラディングといいます。海獣類については、漁網に入ったもの、漂流している遺体、迷入なども同じように呼びます。よく話題になるものとして鯨類のストラディングがありますが、昨年 (2005 年) は神奈川県での鯨類のストラディングが多い年でした。そのうち当館で対応したものについて紹介しましょう。

2月16日：カマイルカ (体長 164.5 cm)。

湯河原町の福浦漁港からイルカが死んでいると連絡があり、現地に向かい、収集 (図1)。

4月22日：カマイルカ (体長 222.5 cm)。

平塚市博物館から平塚市袖ヶ浜の海岸にイルカの遺体があると連絡を受け、当日は個体を確認し、翌日海岸で横浜・八景島シーパラダイスの方と解体して骨格を収集 (図2)。



図1 湯河原町福浦漁港近くにストラディングしたカマイルカ。体表の模様ははっきりと確認できる。



図2 平塚市袖ヶ浜にストラディングしたカマイルカ。腐敗しており、体表の模様ははっきりしないが、図1と比較すると前半身の白色部分が認識できる。



図3 ハブスオウギハクジラの全身 (梅谷綾子氏撮影)。白いバーは1m。

7月27日：ツチクジラ (体長 1040 cm)。

横須賀市長井漁港近くでクジラが座礁しているという連絡がある。当初生きていたが死亡。横須賀市役所、長井漁協、横浜・八景島シーパラダイス、日本鯨類研究所、国立科学博物館、日本大学、中央水産研究所などの方たちと解体・解剖、骨格を収集。

10月21日：ハブスオウギハクジラ (体長 522 cm, 体重 2.9 t, 図3)。

二宮町山西の海岸にクジラが座礁したと連絡があり現地に向かう。当初生きていたが死亡。翌日に解剖。骨格を収集。

1957年～2001年の神奈川県内でのストラディングのデータが、「かながわの自然図鑑③ 哺乳類」(有隣堂発行)にまとめられています。これを見ると、神奈川県内では71件のストラディングがあり、うち相模湾で52件、東京湾で16件が記録されています。種類によって傾向があり、アカボウクジラやハナゴンドウはストラディングの例が多いのに相模湾だけ、スナメリ、マイルカ、マッコウクジラなどは東京湾側に多い傾向があります。

ハブスオウギハクジラのストラディング

昨年のストラディングの中でも10月21日のハブスオウギハクジラは印象的だったので、少し詳しく紹介します。

ストラディングの連絡を受け、現地に向かうと、まだ生きている体長5mほどのクジラが波打ち際に横たわっており、地元、二宮町役場、消防署の方などがクジラの体に毛布を掛け、そこに海水をかけていました (図4)。この様子はテレビのニュースでも流れたので、見た方もいるでしょう。クジラは体の右側を上にして横たわっていて、ときおり体を動かしていました。このクジラには下あごに1



図4 二宮町山西にストラディングしたハブスオウギハクジラ。まだ生きていたため、毛布の上から海水をかけて体表の乾燥を防いでいる。

対の大きな歯がある、オウギハクジラの仲間の特徴がありました (図5)。そして“おでこ”と吻の先端が白い (図6) ことから、ハブスオウギハクジラ (オス) とわかりました。歯の表面にはエボシガイの仲間が付着していました。海水をかける時は、呼吸の時に開く頭にある噴気孔に海水が入らないよう、気をつけてかけました。やがて新江ノ島水族館、横浜・八景島シーパラダイスの方が到着し、クジラの様子を観察して注射を打とうとしましたが、死亡したことがわかりました。一時クジラを海に戻そうという声も挙がりましたが、元気ありませんでしたし、このような作業は専門家が立ち会って行わないと、クジラに巻き込まれておぼれたり、尾でとばされたりする危険があります。



図5 ハブスオウギハクジラの頭部。



図6 ハブスオウギハクジラの下顎の歯。表面に付着しているのはエボシガイの仲間。

残念ながら死亡してしまったハブスオウギハクジラですが、翌日解剖を行い、骨格を博物館に残すことになりました。ハブスオウギハクジラは北太平洋に分布していて、日本でのスランディングはこの個体が8例目にあたります。しかし、これまで成獣の解剖は行われたことがなく、学術的に重要な情報を提供してくれることがわかりました。潮が満ちるとクジラが移動するおそれがあるので、尾にロープをかけ、海岸のテトラポッドにつなぎ、さらに夜間事故がないよう、二宮町役場の方が徹夜で浜を警備して下さいました。翌朝、国立科学博物館の연구원や学生、横浜・八景島シーパラダイス、日本大学、中央水産研究所、日本鯨類研究所などの方たちが集まって下さり、解剖を手伝ってくれました。また、前日の報道から、観衆もたくさん集まっていました。

ハブスオウギハクジラは体長の割に胸ビレが小さく(図3)、体表には多くの傷あとがありました(図7)。楕円形のもの、ダルマザメの噛みあとと思われる。このサメは、クジラなどの体表をアイスクリームのスプーンで削ったような半球形に噛み切って食べるという生態を持っています。また線状の傷は、繁殖期に他のオスとメスを奪い合う争いで付けられたものと考えられます。

解剖は、表皮とその下で体を被っている脂肪層を切り取ることから始まりました(図8)。海生哺乳類は体温の放散を避けるために、厚い脂肪層を持っていて、脂肪のコートを着ているような状態です。脂肪の下に筋肉の層があり、それらをブロック状に切り取り、骨を取り出していきます。一方、臓器に関しては、一つ一つ取り出し、計測し、写真を撮り、顕微鏡観察や分析を行う部位は組織片をホルマリンやアルコールなどで固定していきます。胃の内容物の観察では、ビニール製の植木鉢が出てきました(図



図7 ハブスオウギハクジラの体表の傷あと。



図8 解剖。海生哺乳類は厚い脂肪に被われているため、はじめに脂肪を取り除く。

9)。このような消化できないゴミは、排出されれば問題ありませんが、時に死亡の原因となります。胃の中には寄生虫も数多く生息しており、また、イカの口器もたくさん入っていました。ハブスオウギハクジラはイカが主食といわれていることから、それを裏付ける情報です。このようにして、1体のクジラを解剖し、臓器などの器官は持ち帰り、不要な部分は海岸に大きな穴を掘って埋めました。さて、現場では確認できませんでしたが、持ち帰った肺の観察でこのクジラの死因の可能性のひとつとして、肺の病変が確認できました。

今回の解剖では、所々で観衆に作業の内容や身体の内臓の説明を行うことにしました(図10)。このような説明が、「専門家がクジラを解体しているだけ」という認識を、「解剖を通してクジラや海の様々な情報を得ているのだ」と理解してもらうために大切な機会と考えたからです。

すべての作業が終わり、道具類を片づけて休んでいると、釣り人がこのクジラがスランディングするところを目撃した、と話しかけてきました。話を聞くと、クジラははじめ海上に現れると東の方向に泳いでいき、そこから潜って見えなくなったあと、また海上に姿を現したかと思ったら、浜に向かって突進してきた、ということでした。ハブスオウギハクジラが、なぜこのような行動をしたのかは不明ですが、スランディングした際の様子を知ること



図9 胃から取り出されたビニール製の鉢。表面に付いているのはイカの口器と寄生虫。



図10 観衆への説明。

ができたのは、今後の研究のために貴重な情報といえるでしょう。

スランディングから生まれるもの

本来自然界では、スランディングしたクジラは片づけられずに海岸で腐敗していきます。大きな体ですから、その付近は腐敗臭などがすごいでしょう。しかし、このようなクジラの分解過程は、一方で海岸生物の命の源となっています。実際に平塚市にスランディングしたカマイルカには、米粒ほどの大きさの真黒で艶のあるエンマムシの仲間(図11)がいました。彼らは海岸で腐肉などを食べて生活しています。腐敗したクジラは、海水浴などの人の利用から考えると迷惑ですが、海岸生物にとっては大切な資源なのです。

最後になりましたが、スランディングの対応は決して一人ではできません。多くの人の協力が必要です。昨年のスランディングでは、横浜・八景島シーパラダイス、新江ノ島水族館、二宮町役場、横須賀市役所、二宮町消防署、平塚市博物館、海上保安庁、国立科学博物館、日本鯨類研究所、福浦漁港、長井町漁協など、そして多くの個人の方々に御協力頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。



図11 カマイルカの遺体に集まっていたエンマムシの仲間。目盛りは0.5mm。